

2月28日(日) 栄光に満ちた5つの務め

1 命を与える

(2コリント3:6) 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

2 義とする

(2コリント3:7~11) もし石に刻まれた文字による、死の務めにも栄光があって、モーセの顔の消え去る栄光のゆえに、イスラエルの人々がモーセの顔を見つめることができなかつたとすれば、まして御霊の務めには、どれほどの栄光があることでしょうか。罪に定める務めに栄光があるなら、義とする務めには、なおさら栄光が溢れるのです。…もし消え去るべきものにも栄光があったのなら、永続するものには、なおさら栄光があるのです。

(2歴代誌9:3~8) シェバの女王は、ソロモンの知恵と、建てた宮殿と、食卓の料理、列席の家来や従者たちが仕えている態度とその服装、献酌官たちとその服装、主の宮に上る階段を見て、息も止まるばかりであった。彼女は王に言った。「私が国でああなたの事績とあなたの知恵とについて聞き及んでおりましたことはほんとうでした。…あなたを喜ばれ、その王座にあなたを着かせて、あなたの神、主のために王とされた、あなたの神、主はほむべきかな。」

3 覆いを取り除く

(2コリント3:12~16) モーセが、消えうせるものの最後をイス

ラエルの人々に見せないように、顔におおいを掛けたようなことはしません。しかし、イスラエルの人々の思いは鈍くなったのです。というのは、今日に至るまで、古い契約が朗読されるときに、同じおおいが掛けられたままで、取りのけられてはいません。なぜなら、それはキリストによって取り除かれるものだからです。かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです。しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。

(出エジプト34:29~35) モーセは、主と話したので自分の顔のはだが光を放ったのを知らなかつた。アロンとすべてのイスラエル人はモーセを見た。なんと彼の顔のはだが光を放つではないか。それで彼らは恐れて、彼に近づけなかつた。…モーセは彼らと語り終えたとき、顔におおいを掛けた。モーセが主の前に入って行って主と話すときには、いつも、外に出るときまで、おおいをはずしていた。そして出て来ると、命じられたことをイスラエル人に告げた。イスラエル人はモーセの顔を見た。まことに、モーセの顔のはだは光を放った。

4 自由を与える

(2コリント3:17) 主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。

5 栄光の変革をもたらす

(2コリント3:18) 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。